いかと私は感じている。この見本市は単に農機具などの展示，牛，馬などの品評会，競り市だけでなく，その国の人びとの娯楽施設としての役割も担い，国家指導者も必ず訪れるほど重要なものである。それが経済的に大事であるというばかりでなく，庶民にとって無視できぬ存在であるのは，「祭り」的要素がそこにあるからではないかと思う。最後にこの本に対する感想として，著者が調査し，十ヵ月住んだエストレマドゥーラの町を中心に，隣接するアンダルシーア，そして若干の地中海地域，バレンシア，バルセローナの事例の比較がなされているわけで，スペイン全土に渡る比較が欲しいところである。また本書をきっかけに，今後の氏の他地域での研究調査が進むことを望まれるところである。

B6 判292頁 平凡社 1992.

綾部恒雄著

『東南アジアの論理と心性』

吉松久美子※

はじめに

東南アジアとは世界地図上に確かに存在していながら，その定義を容易に受けつけない非常に複雑で多様性にとむ世界である。本書は文化人類学者の著者が，その東南アジアを一つのまとまりある世界として，そこに暮らすひとびとの論理と心性を描き出そうと試みている。そして，その試みが成功しているのは，三十六年にわたる研究歴から導かれた独創的な視点によるところが大きい。本書は選抜された十九篇の論文から構成されている。

目　次

第一章　“はざま文化”の東南アジア
1．東南アジア小史
2．東南アジア社会の地域性
3．東南アジアの宗教
4．東南アジアの食
第二章　神話と世界観
1．タイの宗教民話
2．穀霊観念の諸相
3．民族複合と世界観
4．日本神話と東南アジア神話
第三章　東南アジア社会の論理
1．ラオ族農民の生活
2．ラオ人の個人史
3．タイ国社会のしくみ
4．ヴェトナム人親族組織の原型
5．トンキン地方の父系親族
6．バリ社会の構造
7．タイ文化の「サヌック」志向
第四章　人間認識・倫理・教育
1．タイ人の人間認識
2．テラヴァダ仏教の倫理と女性
3．タイ国の教育とデック・ワット
4．東南アジアの大学と社会

※大東文化大学講師

東南アジアとは何か

第一章「“はざま文化”の東南アジア」は，東南アジアをインド文明や中国文明の亜流としてではなく，独自性をもつ“はざま文化”として考察することを目的としている。第一節「東南アジア小史」では，稲作を生業とする先史時代から，民族の移動拡散，中国文明の影響，インド文明の浸透，イスラムの進出，西欧文明の洗礼，と基層文化が形成された歴史を，大陸部東半分（ヴェトナム，カンボジア，ラオス），西半分（タイ，ビルマ）と島嶼部（マレーシア，インドネシア，フィリピン，シンガポール，ブルネイ）に分け，それぞれ簡潔に描き出している。

第二節の「東南アジア社会の地域性」では，この章の主要課題である「東南アジアとは何か」という重要な問いかけがなされている。つまり，東南アジアを東南アジアたらしめているものは何か，という問いである。近年，一般的関心が高まるなかで「東南アジア」という呼称が頻繁に用い

られるようになっているが，その使用法の多くが，意味を十分に吟味しない便宜型か，共通性を漠然と訴える感性型か，あるいは多様性の一部を強調する偏向型か，になっている。このようななかで次のような確かな視点から東南アジア社会の共通項を提示しえたことは本書の大きな特徴といえるだろう。

著者はここで東南アジア社会の独自性を，社会組織，価値体系，文明論の三視点から考察している。社会組織では双系的親族組織や柔軟な階級制度などにみられるような組織原理の「多元性」，価値体系では個人に対する制度の緩やかな規定にみられる構造の「弛緩性」，そして文明論的位相では巨大文明とは異なる論理を内在させる「周縁性」を共通項としてあげている。この三者は相互補完的で，組織原理の「多元性」が価値構造の「弛緩性」を導くともいえる。つまり社会が単一原理によって組織されていない場合，全体の構成はより弛緩したもの（ルース）となる。著者はそれを「東南アジア社会が全体としてはたしかにルースであるが，タイトの集団をも内部に散在させているということ，したがって，ルース＝タイトが混在しているという意味でルースという二面性をもっていると考えるべきであろう」と述べているが，この一見矛盾するような論述に著者の深い洞察力を思わずにはいられない。まさにこのような「弛緩性」こそが東南アジア社会の本質なのである。また「周縁性」においても，東南アジア社会がもつ自律性ゆえに，既成の文明論や社会理論が容易に通用しない事実を指摘している。評者も含め，近年ますます多くの若い研究者が東南アジアに魅了される理由を，この指摘は見事に解説しているといえるだろう。つまり，新たな知的挑戦の場として東南アジアが登場してきているのである。

第一章にはさらに第三節「東南アジアの宗教」と第四節「東南アジアの食」があるが，これらは第二節で述べた独自性を具体的な事例で検証しているといえよう。たとえばフィリピンにはキリスト教，インドネシア，マレーシア，ブルネイにはイスラム教，カンボジア，タイ，ラオス，ビルマには仏教が存在しているが，これらの世界宗教がここでは社会を一元化する力とはならず，むしろ既存の民族宗教や精霊信仰と多元的に共存している。この重層信仰こそが東南アジア宗教の特徴としている。また，食ではインドからはコショウ，メキシコからはトウガラシとさまざまな伝播を経験しつつも，独自な食文化を形成しているようすを描いているが，食という身近な例で文化の「周縁性」を論じることができるのは著者の余裕といってもよいだろう。

神話，民話研究の可能性

第二章「神話と世界観」は研究成果を論じるというよりは，むしろこの地域における神話や民話研究の可能性を示唆しているといえよう。第一節「タイの宗教民話」では四つの民話に精霊信仰，バラモン教，仏教の融合や葛藤を読み，第二節「穀霊観念の諸相」では世界的な広がりをもつ穀霊観念が，東南アジアではどのように分布しているかを示し，いまだ民話研究の蓄積が十分でないこの地域における今後の研究を期待させるものとなっている。第三節と第四節は神話や民話の史実への応用の可能性を論じている。第三節「民族複合と世界観」ではアルシャンボールによる「ラオスの宗教構造」を紹介し，ルアンプラバン，シェンクワン，ヴィエンチャン，チャンパサックの四地域の建国神話に生じた変容から民族抗争と統合の歴史を読解し，諸民族の形成に複合や混融が存在したことを明らかにしている。第四節「日本の神話と東南アジアの神話」では神話比較による系譜論が展開されているが，複合的な日本神話の形成に東南アジアが一経路となった痕跡を認めている。

東南アジア社会の論理

第三章「東南アジア社会の論理」では，本書の表題にもなっているように，独創的な視点から東南アジア社会の論理が語られており，大変興味深い章となっている。とくに第六節「バリ社会の構造」と第七節「タイ文化の「サヌック」志向」は

後述するように今後の東南アジア研究に指針を与える意義深いものとなろう。

第一節「ラオ族農民の生活」では著者の長年のフィールドワークをもとにラオス国のラオ族農民の生活が紹介されている。ラオ族は西南部タイ族の一つで，稲作を生業とし，仏教を信仰し，主に核家族母方居住を慣行としているが，彼らの生活を経済，政治，宗教と分けて詳細に紹介している。そして，それが評者がかつて経験したカレン族の生活と酷似しており，諸民族がそれぞれの文化を営む多様な社会でありながら，東南アジアの基層に確かな共通項が存在していることを改めて考えさせられる。第二節「ラオ人の個人史」ではブラフマンの『老人－ラオ村民の伝記－』と『ラオスのサ＝パン＝ムーク村』および著者の「低地ラオ族の村落構造－パ＝カオ部落の場合」を素材として社会構造理解における個人史のもつ有効性について検証している。第三節「タイ国社会のしくみ」では都市と農村，性や年齢による分業，婚姻制度などについてタイ社会が手際よく紹介されている。

第四節「ヴェトナム人親族組織の原型」と第五節「トンキン地方の父系親族」は著者が二十歳代に発表した研究論文ではあるが，いまだにその有効性を失なっていない。著者の東南アジア文化の独自性への模索がすでにここに始まっていたといえるだろう。第四節では中国系統の父家長的組織をもつヴェトナム人の親族組織を分析し，律令上では家督相続にみられる同権を，親族名称では基層に双系的モン・クメール型を，村落組織では血縁よりも地縁的関係を，卵生伝説では女系の存在を探り，その原型に双系的なものがあったと推定している。第五節ではトンキン地方のミュオン族と黒タイ族の親族組織を分析し，タイ系諸族とは異なる黒タイ族の姓とトーテム氏族は，中国・ヴェトナム系統の父系というよりは，むしろタイ族が拡散混融する過程で先住民カー族から採用したものであり，またヴェトナム人の親族組織に類似するミュオン族も，その基層には黒タイ的要素をもつことから，ミュオン族とは先住民とタイ族とヴェトナム人がさまざまに混融したものではないかという仮説を提言している。

第六節「バリ社会の構造」ではまずバリ島の複雑で有機的に結ばれた村落組織，ヒンズー教信仰，多彩で洗練された儀式や芸術活動を紹介し，東南アジア社会のなかでの異質性を示している。バリ社会の異質性はギアーツをはじめとしてさまざまな研究者に論じられているが，著者はその理解の鍵をスクという約縁集団に見いだしている。約縁集団とは同好会のように同じ関心や目的をもつ人々の集まりだが，バリ島には詩の朗読，ガムランの演奏，家の建築のようにそれぞれ目的もつスクと呼ばれる約縁集団が多数存在する。堅固な血縁集団や地縁集団もつバリ社会の考察にあたって，約縁集団に注目した点が評価される。自発的参加による約縁集団は，当然，血縁集団や地縁集団と違って柔軟性に富む。著者はこのスクが外来文化を受容するさいの緩衝地となり，斬新的でかつ伝統的なバリ文化を育んだのではないかと推測している。そして東南アジア社会では珍しい約縁集団の発達を，絶対神をもたないヒンズー教，責任を重視する子育て，バリ島の辺境性で説明しているが，説得力をやや欠いているのが残念である。とくに特異な子育ての背景については詳しい言及が欲しいところである。

第七節「タイ文化の「サヌック」志向」は東南アジア研究だけでなく，文化人類学の研究方法としても非常に示唆に富むものとなっている。「サヌック」は「楽しい」というタイ語であるが，「サヌック」を葬儀参列で問われた経験から，著者は「かくれた文化」との関連を推察することとなる。文化には観察しうる「あらわな文化」と観察しえない「かくれた文化」があることは文化人類学においてよく知られている。この「かくれた文化」はその住人も気づかないゆえに文化の無意識の部分にあたるといってもよい。著者は文化人類学におけるこの「無意識」概念を，言語から文化へ応用したサピア，文化の主旋律として追及したベネディクト，「かくれた文化」を定義したクラックホーン，「意識されない構造」を唱えたレヴィ＝ストロース，と独自の一本の糸で紡いでい

く。さらにその糸は無意識とは無縁に思われる認識人類学にまでつながっていく。「人間精神の集団的無意識」という著者の仮説は，語彙分析に終始し，乾燥化して行き詰まりをみせる認識人類学に新たな可能性と魅力を持ち込むことになるだろう。ところがここまで「無意識」を緻密に論じてきた著者が，「サヌック」とタイ文化を論じるところで唐突にその論を終えている。これには無念さがつのる。ぜひ「サヌック」を用いてタイ文化の無意識を分析して欲しいと思うのは評者だけではないだろう。

東南アジアのひとびとの価値体系

第四章「人間認識，倫理，教育」は，もう一つの表題である東南アジアの心性を論じている。なかでも第二節「テラヴァダ仏教の倫理と女性」は心性を明らかにするだけでなく，後述するように女性論に新たな視点を提供する貴重なものとなっている。また第三節「タイ国の教育とデック・ワット」は現代の教育問題を論じるにあたって，伝統的な仏寺の役割を考察した点で注目される。

第一節「タイ人の人間認識」では人の行為が常に人間観に影響されるという点に着目し，タイ人の心性を身分制度，親族名称，個人名から探ろうとしている。身分制度には権威主義的と平等主義的という二律背反的人間認識を認め，その共存に仏教の輪廻思想があることを指摘している。親族名称では年齢による序列の原理を，個人名では個性の発現を嗜好しない人間観を分析しているが，著者とは異なりタイ人の人間観を個人主義と論じている研究者も多い。ここでは個人主義の定義がさらに議論されるべきであるといえよう。個人主義を「個人の個性を重視すること」という著者の定義に従えば，タイ人の人間関係は非個人主義となる。しかし，集団への規制に縛られない「弛緩性」を問題にすれば，個人意思の尊重という個人主義が発現することになる。この点に関してのさらなる言及がなされていればより議論が深まったように思われる。

第二節「テラヴァダ仏教の倫理と女性」は目覚ましいタイ女性の経済界進出が，実は解放からではなく，女性を宗教活動の中核から排除するというテラヴァダ仏教から生じている事実に注目している。仏僧として教団参加が許されないタイの女たちは，自己実現を世俗的活動に求めることになる。つまり宗教上の「差別」が経済上の「解放」をもたらしたのである。ここでは欧米型の女性解放論が東南アジア社会では単純に応用できない事実を如実に示しているといえよう。そして，これは著者が「はしがき」でも述べているようにこのまま終わらせるには大変惜しい論点である。さらなる女性論としてぜひ発展させて欲しい。

第三節と第四節は教育問題を扱っているが，第三節「タイ国の教育とデック・ワット」では現代教育における寺の役割を考察している。タイでは伝統的に仏寺で教育が行なわれ，僧侶の世話をしながら学ぶ少年をデック・ワット（寺の子）と呼んだ。近代教育導入以降，教育という点では変化が生じたが，今でも何十万人という少年たちがデック・ワットとして長期短期の寺滞在を経験している。現地調査をもとにデック・ワットが寺機能の維持に不可欠なこと，また寺が通学のために利用されている現状を指摘し，寺とデック・ワットと学校の関係を考察する重要性を提言している。ただ，これが提言で終わっているのが残念である。第四節「東南アジアの大学と社会」ではアセアン五ヶ国の高等教育事情を戦前と戦後に分けて紹介し，あわせて現状の問題点も指摘している。各国の高等教育機関の性格は，歴史や社会背景を反映して当然異なっているが，戦後に欧米の実学を直輸入して急激に発展した点では共通している。そしてその偏向への反省と，自文化や学問への模索が始まりつつある現状が述べられている。

以上が本書の要約および評であるが，本書は上述のような質の高い内容を読み易い文章で記しており，東南アジアに興味をもつ入門者はもちろんのこと，研究者にとっても新たな視点を提供する一冊となることであろう。

B6 判366頁 弘文堂 1992.